

物相の上からは興味深いところである。ヒメシャラなど、ここを北限とする種もある。

本書は上記の地域に産する162種のシダ植物について、特徴、採集地などを簡潔に記し、線画やシルエットで葉やその一部、孢子嚢などを図示した、「渡良瀬川支流山塊シダ植物誌」とでもいうべき性格のものである。上記土地的条件とシダ植物相との関連は残念ながら議論されていない。

多数の図を伴う本書は、北関東を中心とした地域のシダ植物相へ関心を向けられる方々には格好の入門書ともなるであろう。(大場秀章)

□千葉県立中央博物館：ブナ林の自然誌 32pls. +136pp. 同館発行。1992。¥1,200+送料 ¥310。

特別展示の解説書とはいうものの、見事な図版と16章にわたる堂々たる論説集である。ブナの仲間：世界のブナ科、世界のブナとブナ林、日本のブナとブナ林、以下すべて頭に「ブナの」か「ブナ林」がつくので省略して、起源と進化、地史的成立過程、植物季節、一生、樹木、草木、蘚苔植物、藻類、地衣類、キノコ、哺乳類、音、保護と、新鮮多彩な陣容をほこる同館の作品らしい。大抵の章には参考文献が示されている。「音」という章は、この種の本では見慣れない項目だが、植物の生活環境の一要素として、今後の展開を期待したい。「藻」についても、常識的には樹皮にもついていることはわかるが、これも一つの環境として研究できると思う。ヒマラヤでは樹皮に着生したコケの間に、ミミカキグサ類がたくさんみられるが、これは捕捉の対象となるプランクトンがいることを意味するのだろう。このような研究主体の展示や解説は、長期的にみて拡大再生産性が高いが、準備もまた大変だったことだろう。客寄せ目当ての特別展とカラー写真ばかりきれいに並べた図録が多い昨今、敬意を表したい。購入についての連絡先は、千葉県立中央博物館ミュージアムショップ (TEL 043-265-3111 内線 308, FAX 043-266-2481), 送金先は千葉県立中央博物

館友の会 (東京 1-537050 または現金書留)。なお送料は2冊目以降は一部70円である。

(金井弘夫)

□八田洋章：箱根の樹木 284pp. 1992. 神奈川県新聞社かなしん出版。17×10.5cm. ¥980。

副題は「ツリーウォッチングの手引」とあり、序文を含めてはじめの30頁ほどが、着眼点についての図入りの説明となっている。本文は一頁に一種をあて、上半は植物の白黒写真、下半が解説である。著者は樹木の分枝や萌芽の様式について観察・研究を積み重ねており、そういう面からの観察の手引を意図したと思われるが、あまり効果をあげていない。第一は紙質の関係からか、写真が鮮明でないことである。最近美しい原色写真の図鑑が食傷気味に出回っているから、これをカラーに取り替えても代わり映えするとは思われない。第二は、記述の部分には著者独自の観察点の指摘が豊富になされているのだが、文章のみなので、よほど気をつけて熟読しないと気付かれないだろうことである。たとえばヤマグルマの枝の傾きと葉の大きさの関係などは、そのつもりになって見てはじめて、そういう現象があることがわかるだろう。第三は最初の「手引」の部分が詰め込みすぎで、読みづらいことである。ここを辛抱して読む者は少ないだろう。植物の写真を簡潔な線画に代え、記述された観察点が重複をかまわず一々図解してあれば、少なくとも読者の知っている植物については著者の意図が伝わって、観察力を深める助けになるものと思う。そうすれば先頭の教科書的な総合解説を、この種の本でやる必要はないだろう。図鑑というと、名前を調べる→名前の由来→利用・万葉植物、という行き方が常套で、出版社もそういう常識から外れた本は敬遠する気配がある。折角の著者の蘊蓄が、みんなに伝わるような企画を立ててもらいたいものだ。

(金井弘夫)